

# 国語科授業案

日時 平成24年12月11日(火) 4校時  
生徒 2年C組 男子19名 女子19名  
授業場 2年C組教室  
授業者 太田 諭

1 単元名「資料や文章から読み取ったことをもとに、自分の考えを書こう。」(中心教材：学ぶ力)

## 2 単元について

### (1) 教材観

OECDによる国際的な学力調査の結果等を受け、我が国の青少年のいわゆる「読解力低下」が指摘されて久しい。また、全国学力・学習状況調査の結果からは、北海道の青少年の課題として「読む能力」と「書く能力」を連動させることに弱さがあるという実態がある。

本単元における中心教材「学ぶ力」は、内田樹氏によって書かれた一つの「学力論」である。内田氏は学力を、「学ぶことができる力」ととらえ、人と比較すべきものではなく、過去の自分との比較において成り立つものであると定義している。また、その意味での学力が伸びる条件として、「無知の自覚」「師を求める姿勢と直感」「師をその気にさせる開放性」を挙げている。そして現在の学力低下の本質は、そのような姿勢の欠如にあると述べている。この考え方は、一般的な「学力」の定義とは異なっているが、相当の説得力をもって私たちに訴えるものがある。

論理の展開としては、非常に平易でわかりやすい文章といえるため、筆者の主張を読み取ることにについては、比較的容易であると考えられる。

### (2) 生徒観

省略

### (3) 指導観

手だて A 指導事項の定着に資する「単元を貫く言語活動」の設定

B 多様な読み方のできる非言語資料の提示

以上のことから、本単元においては「読むこと」と「書くこと」とを連動させた単元を設定することにより、論理的な分析的な表現や論理的な思考力を高めたいと考えた。そこで、単元を貫く言語活動を、「日本人の学力は低下しているか？についての自分の考えを書こう」とした。自己の考えの形成に関わっては、OECDの学力調査における日本の順位の変化を知る段階、OECD調査に対する他国の参加状況を知る段階、最後に、「学ぶ力」を読んだ段階の3段階を用意することとした。

1時間目には、OECDによるPIISA調査結果という非言語型資料を用いる。これは、1年生時に学習した「文章と図表やグラフとの関連に注意して読むこと」の発展として取り扱う。まず「学力」の辞書的な意味を把握した後に、過去4回のPIISA調査における順位の変化を配付、提示する。その段階で現在の日本人は学力が低下しているか？という問いに対する自らの意見を形成し、交流する。その後、PIISA調査に対する参加国と順位推移を配付する。その段階で再び、現在の日本人の学力は低下しているか？という問いに対する意見形成を行い、交流する。1時間目の最後には、どのような情報を追加すべきか？非言語的資料を読むときに注意すべきことは何か？という問いについて考える。このことによって、情報は多面的でなくてはならないことに気付かせたい。

2時間目には、「学ぶ力」の内容を把握し、内田氏の定義する「学力」について押さえるとともに、その論に対する自分の考えをまとめるよう指導する。

3・4時間目には、これまで押さえてきた事柄を踏まえ、自分の学力観を形成し、テーマに即した文章を書く。その際には、構成の工夫と、既習漢字を用いることを徹底させる。

### 3 単元目標

「日本人の学力は低下しているか？についての自分の考えを書こう」という言語活動を通して、非言語資料や「学ぶ力」の情報に注意して読もうとする態度を培うとともに、読み取った事柄を基に、自分の学力に対する考え方を、説得力をもたせる構成を工夫して書くことができるようにする。

## 4 評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項
ア 資料や文章に	ア 非言語的資料を分析	ア 学力に対する自分なりの	ア 学力という抽象的

ある学力に関する情報に注意して読もうとしている。	して読み取れる情報を取り出ししている。 イ 学ぶ力において述べられている「学力」とその「伸ばし方」を捉えている。	解釈をもち、三つの資料を踏まえながら現在の日本人の学力に対する自分の考えを書いている。 イ 文章に説得力を持たせるために構成を工夫している。	な概念を表す語彙に多様な解釈があることを理解している。 イ 学年別配当漢字に示されている漢字を文章の中で使っている。
--------------------------	-------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------

## 5 本時案（1 / 4 時間目）

### (1) 本時の目標

「非言語型資料から学力に関する情報を読む」言語活動を通して、書かれている情報を分析することができる。また、学力に対する自分の考えを形成することができる。

### (2) 本時の展開

(○…発問, △…補助発問, □…指示・説明)

主な学習活動	教師の働きかけ・手だて	【評価方法】 備考
1 単元の見直しをもつとともに、既存の知識から、学力の定義について表現することができる。	○今回の学習は書く学習です。テーマは「日本人の学力は低下しているか？」です。では、学力とは何でしょう。	ワークシート配布 机間指導
<b>日本人の学力は低下しているか？についての自分の考えを書こう</b>		
2 「学力」の辞書的な意味を知り、自分の立てた定義と比較することができる。	□ある辞書では、学力とはこのような意味で紹介されています。 ①学問の力量。 ②学習によって得られた能力。学業成績として表される能力。	
3 PISA調査における日本の順位を分析・解釈することができる。 ・相対的に順位が下がっているが、2009年に持ち直している。 ・最初は1位だった数学的リテラシーが下がっているの、学力は低下している。など	○では、ここにある調査結果があります。ここから学力についてどんなことが言えるでしょう。 ・これだけでは難しいと思われるが、あえて判断するよう促す。	個→一斉 【ワークシート】 黒板に掲示
4 分析・解釈したことを説明することができる。	□では、発表してください。	計画指名→挙手
5 PISA調査における参加国の推移にかかわる資料を分析・解釈することができる。 ・新規参入国が上位に入っている。 ・日本は検討している。 ・参加国が年々増加しているので、変化を見るのは難しい。など	○では、次の資料を配ります。ここからはどんなことが言えるでしょう。	机間指導 個→一斉 【ワークシート】 黒板に掲示 計画指名→挙手
6 分析・解釈したことを説明することができる。	□では、発表してください。	一斉
7 正確に分析するため他に必要な情報を指摘することができる。 ・得点の推移・問題の難易度等	○他にどんな情報があったらいいと思いますか。	指名→挙手
8 1つの資料だけでなく、複数の資料から多面的に読み取ることの必要性に気づき、記述することができる。	○このような文章ではない資料を読み取るときには、どんな点に注意が必要でしょう。	【ワークシート】

## 「筆者の考え」を読みとろう。ワークシート③

言葉は変わっていく〇〇〇

清水義範

言葉というのは時とともに変化するというの□事実だ。変化するからこそ、もともとの形を残したい。残さないのは日本語の乱れだ、という気□するのだが、場合によっては、今はもうそういう言い方はしないよね、その言い方は古くさい、というような① カンソウ になること□ある。そんなところで、まさしく言葉は生きているのだ。

「かわいい子には旅をさせよ」ということわざを、② サイキン の若い人は、かわいい子には旅をさせて、③ ケンブン を広めさせ、いい④ タイケン を積ませてやろうよ、という意味だと思ってるそうだ。

これは、今と昔とでは旅のイメージが大きく変わっているからしかたがないと□言えるのだが。昔は、旅をするというのは大変なことで、水さかずきを交わしたぐらいのものであり、親もとを離れて大いに苦労をしたのだ。だからこのことわざは、かわいい子だからこそ⑤ セケン に出して苦労させなくちゃ、というニュアンスだった。

でも、時代が変わればことわざの受け止め方だって変化していった。□でも、  
高校生の作文のコンクールの審査員しんさいんをしていた時のこと、ある年の課題で、「百聞と一見」というのがあった。「百聞は一見に如かず」ということわざをふまえて、そのどっちがいいのか、ゲーム的にデベートしてごらん、という課題だ。

ところがそのテーマに対して、高校生の多くが、⑥ シカク 情報と聴覚情報はどっちが確かか、という論考をするので驚いてしまった。テレビより、⑦ アンガイ ラジオのほうが真実が伝わったりする、なんていう論だ。

違うんだけど、とわたしは思った。聞く、というの、ひとに聞くことであり、伝聞なのだ。そして見るというのは、自分がその目で見ること。つまりあのことわざは、伝聞よりもジッタケンのほうがよくわかる、ということをしているのである。テレビで戦争の様子を見るのは、むしろ百聞のほうであり、その⑧ センチ へ⑨ ジツサイ に行ってみるのが、一見である。

しかしまあ、テレビのない時代のことわざにはテレビで見ることまでは考えられてなくて、ただ、目か耳か、という話になって□のも⑩ ムリ はない。そうやって、ことわざの意味もニュアンスが変わって□のだ。

「筆者の考え」を読みとろう。ワークシート④

次の文を比較しよう。

ア 時とともに変化していくというの**は**事実だ。  
 イ 時とともに変化していくというの**も**事実だ。

--

ウ しかたがないといえるのだが。  
 エ しかたがないと**も**いえるのだが。

--

オ 言葉の受け止め方だって変化していく。  
 カ 言葉の受け止め方だって変化して**いって**

--

筆者の考えをまとめると……。

言葉が変化するのも事実で、**①四字** 気もするが、**②四字** と感じることもある。ま  
 しく言葉は **③五字** 。

筆者は言葉が変化することについては、**④六字** と考えている。だが、「も」「や」「  
 などから考えると、どちらかという**⑤**」である。

④		①													
		②				③									

漢字で三文字

⑤			
---	--	--	--

## 「筆者の考え」を読みとろう。ワークシート①

### テレビ言葉の「聴き方」

#### 梶原しげる

どんなに新聞や本で「日本語の① ミダれ」を憂 ゆうりよ慮しても、テレビの影 えいき響 ようりよくの前には無力かもしれませんが。今やテレビは、多くの人にとって隣 りんじん人、友人のような② ソクザイ。それが証 しょうじょう 拠に、「だれにも言えない なや悩み」をテレビでならうち明ける、なんてかたも めずら珍 めずらくはありません。しかしながら、テレビがよき③ キウジ「であるかというとかなり④ ギモンがあるのも確かです。

しゃべる日本語を考えるうえで、まずは、テレビから出てきて、いつのまにかわたしたちの日常生活まで浸 しんじ食 じしてきた「変なしゃべり言葉」をみていきましょう。

「材料をおさらいしておきましょう。こちらになります。」 シヨク する前に、司会者がこんなふうに言っていました。さらっと聞き流せばなんということもない言い方ですがわたしにはちよつと引つかかってしまうのです。

ファミリィレストランのウェイトレスが料理を運んできて「こちらポークソテーになります。」ぐらいなら我慢もできますが、いやしくも公共の⑥ デンバ でものを言う人間がフリップを指さして「材料はこちらになります。」「お店の場所はこちらになります。」「電話番号はこちらになります。」「料金はこちらになります。」ってそれはないでしょう。

なんでもかんでも「なりません」を使おうというのは、「です」では、はつきり言いきる感じが冷たく聞こえやしまいか、言葉が短くて間 まがもたないんじゃないか、丁寧 ていねいな感じが不足するんじゃないか、相手 あいてがこちらに⑦ テキイ かを抱 いだきはしないか、と卑屈 ひくつになって、とりあえず無難 むなんに、という軟 なん弱 じやくな⑧ カクが見 みえ隠 かくれしているように感じられます。

「電話番号はこちら、〇〇〇の〇〇〇〇です。」とずばっと、明確 めいせつに、潔 けつく、しかもそれでいて聞き手を敬 やううように、メリハリと間 まをきかせて、丁寧 ていねいな雰 ふん囲 い気で伝えるのがプロというもの ものです。ある程度年齢のいったかたなら、「ごじます」という表現 げんげんも使 もちってほしいものです。「ご ごじます付 つか なんて大時代 おほいじだいな言葉 ことばはととても、というあなた。軽い調子 ていしで滑 なめらかに発音 はつおんすれば、⑨ みそ みそと使 もちい勝手 かたてのいい言葉 ことばとして活用 かっくわできるんですよ。

「こちら味噌 みそラーメンになります。」と「こちら味噌 みそラーメンでございます。」

あなたはどちらの店で食べたいですか？  
「こちらが材料になります。」と「こちらが材料です。」「こちらが材料でございます。」  
あなたはどちらの番組 ばんぐみを見たいですか？

この文章 ぶんしょうにおける筆者 しやうしやの「中心 しんしんとなる考 こうえ」は次のうちどれが最も適切 てきせきですか。

ア 多くの日本人 にほんじんにとって、テレビは隣 りんじん人、友人 ゆうじんのような存在 そんざいであり、人に言 いえない悩み なやみも打ち明 あけられる。

イ 日本語 にほんごの美 みしさを考 こうえたとき、「です」よりも「ごじます」の方が優 ゆうれた表現 げんげんである。

ウ 日本語 にほんごの乱 らんれは全て、「変 へんなしゃべり言葉 ことば」を生 せいみ出 だしてきたテレビの責 せき任 にんである。

エ テレビ てれびから出 でてきた「変 へんなしゃべり言葉 ことば」が日常生活 じふじやうせいかつに浸 しん食 じしてきている。

オ 近 きん頃 きんのファミリィレストラン ファミリィレストランの対 たい応 おうは、どんどん悪 あくくなってきた。

理由

## 「筆者の考え」を読みとろう。ワークシート②

今どきの言葉づかい 金田一秀穂

おしゃべりに使う言葉には、流行語といわれるものがある。若者どうしのおしゃべりには欠かせないものである。流行語を使うことよってしか伝えられない彼らの気持ちがある。おしゃべりについて考えるとき、彼らの言葉を① ムジ できない。

日本人の大学生にも日本語学などを教えている手前、彼らとおしゃべりは、わたしにとって研究のネタの大事な② シムバ の場でもある。

しかし、若者の言葉づかいについて、いろいろ③ ヒハンテキ にいわれることがある。「言葉の乱れ」とか「日本語を破壊するもの」とか。

言葉は変化することが④ ホンシツ である、と昔の偉い言語学者が言っている。変化するけれど、だれかが変えようと思っても、変えることはできない。逆に、変化させまいとしても、そのままの形で保たせることは決してできない。

そうであれば、彼らの言葉を一方的にダメなものとして見るのではなく、言葉のおもしろさを表すものとして考えることもできるだろう。

それに、流行語というのは、全く新しい言葉ではない。たいていの場合、それは以前にもあった言葉の新しい使われ方であることが多い。「等身大」とか「変革の時代」というのは昔にもあった。少し使われ方が変わっただけで、全く新しい語を作り出すことはできない。恐れるに足らない。

⑤ ユダ 新しい語を今までの日本語に増やすということを考えると、外来語とか流行語は、日本語が ユダ かななるというように考えることができるのだから、むしろ望ましいことなのかもしれない。

ら抜き言葉というのが問題になって久しい。「食べられる」というべきところを「食べれる」と言ってしまう。「見れる」や「来れる」もら抜き言葉である。これについてはいろいろな議論があるが、わたしはら抜きでもかまわないと思う。ら抜き言葉は⑥ タイイユウジダ から現れていて、今に始まったことではない。自然の趨 すうせい 勢 せい である。ら抜きを⑦ イシキ するあまり、「帰る」の可能性を「帰られる」にし、「行く」を「行けられる」にしてしまうほうが問題であろう。

「すごい暑い」という言い方は、本当は「すごく暑い」でなければならなかった。ちょっと小難しい言い方をするとき、「すごい」は形容詞であり、用言を修飾するときには（動詞や形容詞の前にくるときには）、「すごく」という連用形にしなければならぬというきまりがある。ただ「すごい」という副詞が新しくできたのだと考えれば、「すごい暑い」は文法的に正しいということになる。

言葉が乱れているというより、言葉が変化していると考えの方がいいのではなからうか。

この文章の「筆者の考え」をまとめよう。

「 や 」は日本語が「 は 」になると考えることができる。むしろ「 は 」ことかもしれない。

日本語は、「 は 」というより「 は 」と考えるべきだ。



## 「言葉を考える」構想

昨年「乱れ」か「変化」かという書くことにつなぐ実践を行った。

その結果、「変化」と捉える生徒が多いことに衝撃を受けた。しかし、よく考えれば当然である。なぜなら、そもそも「乱れ」「変化」の二元論で捉えること自体に無理があるのである。明らかな「乱れ」と捉えられ、使うべきでない言葉「ウザい」「キモい」「むかつく」「消えろ」「死ね」などの言葉と、変化と捉えてもやむなしとする言葉「ら抜き」「すごい〜」等は、次元の違うものなのである。

今回「言葉について考える」を行うにあたっては、言葉の乱れと変化を自分なりに分析することを行わせたい。そのことによって、言語感覚が人それぞれ違うことに気付き、自らの言語感覚が適切なものであるのかを判断させたいと考える。

## 教材観

### 言葉に対する三者の立場

清水氏 言葉が変化することに対して否定的ではあるが、しかたがない面もあると述べる。

## 指導事項の重点化

中学校1年生 説明的文章における指導事項

要旨 言いたいこと・大体的内容→要約と変わらぬ

要約

昔は、旅をするというのは大変なことで、水さかずきを交わしたぐらいのものであり、親もとを離れて大いに苦勞をしたのだ。だからこのことわざは、かわいい子だからこそ世間に出して苦勞させなくちゃ、というニュアンスだった。

高校生の作文のコンクールの審査員をしていた時のこと、ある年の課題で、「百聞は一見に如かず」ということわざをふまえて、そのどっちがいいのか、ゲーム的にディベートしてごらん、という課題だ。

ところがそのテーマに対して、高校生の多くが、視覚情報と聴覚情報はどっちが確かか、という論考をするので驚いてしまった。テレビより、案外ラジオのほうが真実が伝わったりする、なんていう論だ。

違うんだけど、とわたしは思った。聞く、というのは、ひとに聞くことであり、伝聞なのだ。そして見るというのは、自分がその目で見ること。つまりあのことわざは、伝聞よりも実体験のほうがよくわかる、ということを知っているのである。テレビで戦争の様子を見るのは、むしろ百聞のほうがであり、その戦地へ実際に行ってみるのが、一見である。

本語の変化に対して、 的である。



ことがわかる。

形だけが強さを奮う例

制服

ブランド品

も から捉えられるニュアンス

しまう から捉えられるニュアンス

テレビの影響で、変なしゃべり言葉が浸食してきている。

指示語・接続語のとらえ方

指示語より前から探す

指示語と置き換える

前後の文の関係をつかむ。

接続語の働きを理解する。

語句・細部のとらえ方 1

要点・段落のとらえ方 3

四つに入る言葉 も  
三つに入る言葉 しまう

足が棒になる  
骨が折れる  
目と鼻の先  
手を貸す  
涼しい顔  
口がかたい  
耳を疑う  
胸がつぶれる  
腹をわる  
歯牙にもかけない  
舌の根も乾かぬうち  
開いた口がふさがらない  
奥歯に物のはさまったような

犬猿の仲  
袋のねずみ  
瓜二つ

立て板に水  
蟻のはい出るすきまもない  
大船に乗った気持ち

板につく  
けりがつく  
物言いがつく  
王手をかける  
一目置く

道草をくう  
棚に上げる  
気にくわない  
隅に置けない  
取るに足らない

情けは人のためならず  
気のおけない  
二の足を踏む  
二の舞を演ずる

視点1・

視点2・  
漢字確認

視点3・  
班による交流活動の設定

視点4・ 日本語に関するアンケートの実施

も から捉えられるニュアンス

しまう から捉えられるニュアンス

どんなに新聞や本で「日本語の乱れ」を憂慮しても、テレビの影響力の前には無力かもしれません。今やテレビは、多くの人にとって隣人、友人のような存在です。それが証拠に、「だれにも言えない悩み」をテレビでならうち明ける、なんてかたも珍しくはありません。しかしながら、テレビがよき「教師」であるかというところかなり疑問があるのも確か

です。

しゃべる日本語を考えるうえで、まずは、テレビから出てきて、いつのまにかわたしたちの日常生活まで浸食してきた「変なしゃべり言葉」をみていきましょう。

「材料をおさらしておきましょう。こちらになります。」

お料理番組で最後、「作品」ができあがったあと、みんなで試食する前に、司会者がこんなふうに言っていました。さらっと聞き流せばなんということもない言い方ですがわたしにはちょっと引っかかってしまうのです。

ファミリーレストランのウェイトレスが料理を運んできて「こちらポークソテーになります。」ぐらいなら我慢もできますが、いやしくも公共の電波でものを言う人間がフリップを指さして「材料はこちらになります。」「お店の場所はこちらになります。」「電話番号はこちらになります。」「料金はこちらになります。」ってそれはないでしょう。

なんでもかんでも「なります」を使おうというのは、「です」では、はっきり言いきる感じが冷たく聞こえやしまいか、言葉が短くて間がもたないんじゃないか、丁寧な感じが不足するんじゃないか、相手がこちらに敵意を抱きはしないか、と卑屈になって、とりあえず無難に、という軟弱な心理が見え隠れしているように感じられます。

「電話番号はこちら、〇〇〇の〇〇〇〇です。」とずばっと、明確に、潔く、しかもそれでいて聞き手を敬うように、メリハリと間をきかせて、丁寧な雰囲気伝えるのがプロというものです。ある程度年齢のいったかたなら、「ございます」という表現も使ってほしいものです。「ございます」なんて大時代な言葉はとてとても、というあなた。軽い調子で滑らかに発音すれば、意外と使い勝手のいい言葉として活用できるんですよ。

「こちら味噌ラーメンになります。」と「こちら味噌ラーメンでございます。」

あなたはどちらの店で食べたいですか？

「こちらが材料になります。」と「こちらが材料です。」「こちらが材料でございます。」

あなたはどちらの番組を見たいですか？

おしゃべりに使う言葉には、流行語といわれるものがある。若者どうしのおしゃべりに欠かせないものである。流行語を使うことによってしか伝えられない彼らの気持ちがあがる。おしゃべりについて考えるとき、彼らの言葉を見捨てることはできない。

日本人の大学生にも日本語学などを教えている手前、彼らとのおしゃべりは、わたしにとって研究のネタの大事な取材の場でもある。

しかし、若者の言葉づかいについて、いろいろ批判的にいわれることがある。「言葉の乱れ」とか「日本語を破壊するもの」とか。

言葉は変化することが本質である、と昔の偉い言語学者が言っている。変化するけれど、だれかが変えようと思っても、変えることはできない。逆に、変化させまいとしても、そのままの形で保たせることは決してできない。

そうであれば、彼らの言葉を一方的にダメなものとして見るのではなく、言葉のおもしろさを表すものとして考えることもできるだろう。

それに、流行語というのは、全く新しい言葉ではない。たいていの場合、それは以前に

もあつた言葉の新しい使われ方であることが多い。「等身大」とか「変革の時代」というのは昔にもあつた。少し使われ方が変わっただけで、全く新しい語を作り出すことはできない。恐れるに足らない。

新しい語を今までの日本語に増やすということを考えると、外来語とか流行語は、日本語が豊かになるというように考えることができるのだから、むしろ望ましいことなのかもしれない。

ら抜き言葉というのが問題になって久しい。「食べられる」というべきところを「食べれる」と言ってしまう。「見れる」や「来れる」もら抜き言葉である。これについてはいろいろな議論があるが、わたしはら抜きでもかまわないと思う。ら抜き言葉は大正時代から現れていて、今に始まったことではない。自然の趨勢である。ら抜きと意識するあまり、「帰る」の可能形を「帰られる」にし、「行く」を「行けられる」にしてしまうほうが問題であろう。

「すごい暑い」という言い方は、本当は「すごく暑い」でなければならなかった。ちょっと小難しい言い方をすると、「すごい」は形容詞であり、用言を修飾するときには（動詞や形容詞の前にくるときには）、「すごく」という連用形にしなければならないというきまりがある。ただ「すごい～」という副詞が新しくできたのだと考えれば、「すごい暑い」は文法的に正しいということになる。

言葉が乱れているというより、言葉が変化していると考え方がいいのではなからうか。